

謡曲「蟻通」について

前 田 正 民

甲南園文第四号に、能一篇と題して「咸陽宮」について記したが、今度は「蟻通」について記すこととした。

一、曲柄

蟻通は観世・宝生・金春・金剛・喜多の各流に存する現行の曲で、本来四番目の一段劇能であるが、略協能としても演ぜられる。

二、役別と能の装束

シテ(宮人) 尉髪をつけ、小尉の面をかける(直面の場合もある)。翁鳥帽子をいただき、小格子厚板を着附に着て、白大口をはき、上に褙狩衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇、長柄傘、松明、後に幣)

ワキ(紀貫之) 黒風折烏帽子をいただき、厚板を着附に着て白大口をはき、上に単狩衣を着し、腰帯をしめる。(持物、扇)

ワキツレ(従者二人) 無地熨斗目を着附に着、素袍上下を着て、小刀をさす。(持物、扇)(一人は別に太刀を持つ)(素謡の時は謡わない)

三、所

現在の大阪府泉南郡長滝村の蟻通明神(≡蟻通神社)である。

枕草子「社は」の条に、「蟻通の明神、貫之が、馬のわづらひける

に、この明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけむに、やめ給ひけむ、いとをかし」と記し、更に蟻通とつけられた所以を述べてある。現存の社は規模は大きくないが境内は可なり幽邃な感じがする。

四、作者と世阿弥

本曲は世阿弥も非常に関心を有った曲で、川瀬一馬博士著の世阿弥二十三部集から抜萃すると次の通りである。

「音曲五位之詠」に、「関曲躰」として、

「瀟湘の夜の雨しきりに降って、遠寺の鐘の声も聞えず、何となく宮寺などは、深夜の鐘の聲、御灯の光なども神さび、心も澄み渡るに、社頭を見ればともし火もなく、すずしめの声も聞えず、神はきねがならはし、いまこそ申すに、宮守ひとりも見えぬ事よ。よくよく御灯はくらくとも、和光の影もよもくからじ、あら無沙汰の宮守どもや」(八〇頁)と、蟻通の一節が記されている。

「能作書条々」に、「一、おほよそ、三躰の能、近来、押し出だして見えつる世上の風躰の数々。八幡・相生・養老・老松・塩釜・蟻通、如此老躰数々」(一二三頁)

「五音」の下巻に、

「一、関曲、これは各別の曲間なり」云々の文の後に、「蟻通 指川瀟湘の花の雨しきりに降って遠寺の鐘の声も聞えず」(二〇九—二一三

「世子六十以後申案談儀」に、

増阿、世子の能を批判して言ふ「有難や和光守護の日の光、豊かに照らす天が下」など、たぶやかに言ひ流す所は大王。蟻通の初めより終まで喜阿。かいつくろひかいつくろひ、曲舞働きは、観阿なりと、云々。「蟻通とも思ふべきかはとは、あら面白の御歌や」など、「これ六道の衝に、定め置いて、六の色を見するなり」などやうなる所、「何となく宮守などは、深夜の鐘の声御灯の光」など、「夜毎灯火もなく、すずしめの声も聞えず」か様の所、皆喜阿懸りなり。「神は宜禰が習はし」など、かくと言ひしなり。「宮守独りも、」の様なる「ひ」文字、約りて「ひつ」といひしなり。(二七八頁)

八幡・相生・養老・老松・塩釜・蟻通・箱崎・鷓羽・盲打・松風村雨・百万・松垣の女・薩摩の守・実盛・頼政・清経・敦盛・高野・逢坂・恋の重荷・佐野の船橋・泰山府君 これ以上、世子作。(三一八頁) 蟻通など、松明を振り翳して出づる、肝要ここばかりなり。(三二四頁)

世阿弥二十三部集には右のように度々出て居る。増阿の批判は節付や所作についての言であるが、蟻通の基の詞章は既にあつたのを世阿弥が能楽として手を加えて完成したものと思われる。それは、右記に「これ以上世子作」の文によつても知られる。

序ながら佐成氏は謡曲大観に、「何となく宮守など」の「なんど」は現行本にはないが、光悦本にはあると記されているが、宝生流には現行本にある。佐成氏は現行の観世本にはないという意で書かれたのかも知れないが、誤解され易いので書き添えておく。

五、出典

此の曲の出典は貫之集に拠つたものと思われる。貫之集第九 雑に 紀の国に下りて帰りのぼりし道にて俄に馬の死ぬべく煩ふ所にて道ゆく人々立ち止りていふ是れはここにいまする神のし給ふならむ年頃社もなくしるしも見えぬどうたである神なりさきさきもかかるには祈りをなむ申すといふにみてぐらもなければ何わざもせて手洗ひて神おはしげもなしやそもそも何の神とか聞えむと問へば蟻通の神といふを聞きて詠みて奉りける馬の心地やみにけり

搔き曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは(国歌大系貫之集三三七頁)

六、本曲の梗概

紀貫之、紀伊玉津島明神参詣を思い立ち、旅の途中泉州で、日が暮れ、大雨が降り、乗馬も病み臥し、途方にくれて居る処へ、一人の宮人傘をさし松明を照らして現われたので、困却の旨を告げると、宮人は下馬して通つたかと問う。貫之はこゝは馬乗の出来ぬ処かと尋ねると、こゝは蟻通の明神の在す処で馬乗などすれば神の咎めも甚だしく命も危かるうと言ひ、名を聞くので貫之だといふ。貫之なら歌を詠んで神慮を慰めよというので「雨雲の立ち重なる夜半なればありとほしとも思ふべきかは」と詠むと、宮人も感歎し、歌の徳をたたえなどするうち病馬も忽ちに癒える。貫之の請により宮人が祝詞を捧げるうち、自分は明神であると言ひながら鳥居の笠木のあたりに隠れ行き、貫之も悦んで旅路に立ち返る。

七、本曲の本文

昭和版の宝生流によつて掲げたが、能楽としての術語は多少省略

し、節付のある部分には『をつけ、詞(節付のないところ)の部分には「をつけて区別した。本文の送仮名は昭和版のままにし、振仮名は読み方を示すため、昭和版に記されている以外に適宜附加したところがある。読み方に誤読されるおそれが無いと思われる処は昭和版に記されてあつても省略した処もある。

○ワキ次郎「和歌の心を道として、和歌の心を道として、ヤ玉津島に参ら

んワキ「是は紀の貫之にて候。我和歌の道に交はるといへども、未だ

住吉玉津島に参らず候程に、唯今思ひ立ち紀の路の旅に志し候ヤ

「夢に寝て現に出づる旅まくら。現に出づる旅まくら。夜の関戸の明け

暮れに都の空の月影を、さこそと思ひやる方も雲居は跡に隔たり暮れ

渡る空に聞ゆるは里近げなる鐘の声里近げなる鐘の声。「あら笑止や、

俄に日暮れ大雨ふり、しかも乗りたる駒さへふして、前後を弁へず候

は如何に、「灯暗うしては数行眞氏が涙の雨の、足をもひかず驢ゆか

ず。真意いかかすべし便りもなし。あら笑止や候。瀟湘の夜の

雨頻りに降って、遠寺の鐘の声も聞えず。何となく宮寺などは、深

夜の鐘の聲、御灯の光などにこそ、神さび心も澄み渡るに、社頭を

見れば灯もなく、すずしめの声も聞えず。神は宜禰が習はしとこそ申

すに、宮守一人も見えぬ事よ。よしよし御灯は暗くとも、和光の影は

よも曇らじ。あら無沙汰の宮守どもやワキ「なうその火の光について

申すべき事の候シテ「此あたりにはお宿もなし。今少し先へお通りあ

れワキ「今の暗さに行く先も見えず。しかも乗りたる駒さへ臥して、

前後を忘れて候なりシテ「さて下馬はわたりもなかりけるかワキ「そも

や下馬とは心得ず。ここは馬上のなき所かシテ「あら勿体な御事

や。蟻通の明神とて、物咎めし給ふ御神の、かくぞと知つて馬上あら

ば、よも御命の候べきかワキ「これはふしぎの御事かな。さて御社は

シテ「此森の中ワキ「げにも姿は宮人のシテ」ともしの光の影より見れば

ワキ「げにも宮居はシテ「蟻通の地」神の鳥居の二柱、立つ雲すきに、

ヤツハ見ればかたじけなや。げにも社壇のありけるぞ。ヤツ馬上に折り

残す、ヤツ江北の柳陰の、ヤツ糸もつなく駒、かくとも知らで神前を

おそれざるこそはかなけれおそれざるこそはかなけれシテ「楮御身は

如何なる人にてわたり候ぞワキ「これは紀の貫之にて候が、住吉玉津

島に参りて候シテ「楮は貫之にてましますか。貫之にてましますば、

歌を詠うで神をすずしめ御申し候へワキ「これは仰せにて候へども、

それは得たらん人にこそあれ。我らが今の詞の末、いかで神慮に叶ふ

べきと、思ひながらも言の葉の、末を心に念願し、「雨雲の立ちかさ

なれる夜半なれば、ありとほしとも、思ふべきかはシテ「雨雲の立ち

重なる夜半なれば、ありとほしとも、思ふべきかは、「面白し面白

し。我等が叶はぬ耳にだに、面白しと思ふ此和歌を、などか納受な

るべきワキ「心に知らぬとがなれば、何か神慮に背くべきとシテ「万の

言葉は雨雲のワキ「立ち重りて暗き夜なればシテ「ありとほしとも思ふ

べきかはとは、あらおもしろの御歌や地「凡歌には六義あり。これ六

道の、ヤツちまたに定めおいて六つの色を見するなりワキ「されば和

歌のことわざは、ウヤされば和歌のことわざは、ヤ神代よりも始まり、

今人倫に遍し誰かこれをほめざらん、ヤ中にも貫之は、御書所を承

りて、ヤういにしへ今までの歌の品を選びて、よろこびを述べし君が

代の^{スグ}なる道をあらはせり^{クセ}。ヤハ、凡思^{オノオモ}つて見れば歌の心すなほなるは、これもつて私なし。ヤア人代^{ニンダイ}に及んで、甚興^{ヘトハク}なる風俗^{フウク}。ヤ長歌短歌^{ナガカミコトコト}旋頭混本の^{センドウコンポン}たぐひこれなりヤ。雑体^{ザアテイ}ひとつにあざれば、ヤ源流漸くしげる木の花のうちの鶯また秋の蟬の吟の声いづれか和歌の数ならぬ。ウヤハ、されば今の歌、わが邪をなさざれば、なかは神も納受の、心にかなふ宮人もワキ『かかる奇特^{キョクテク}に逢坂^{オオサカ}の地』関の清水に影みゆる、ヤ月毛^{ツキモウ}の此駒を引き立て見ればふしぎやな。もとの如くに歩み行く。ヤ越鳥南枝^{エビトウ}に巢をかけ胡馬北風^{コバキフウ}にいばえたり。ヤハ歌に和らぐ神ごころ、ヤハ誰か神慮^{カミコト}の誠を仰がざるべき^{オノ}。『宮人にてましまさば、祝詞^{ノト}を讀んで神をすずしめ御申し候へシテ』心得申し候。『いで祝詞を申さんと、神の白木綿^{シロキ}かけまくもワキ』同じ手向とゆふ花^{イクバナ}のシテ『雪を散らしてワキ』再拜^{サイハイ}すシテ『謹上再拜^{ウヤマア}。敬つて白す神司^{カミツカサ}。ハチニ^{ヨオトメ}』八人の八乙女、五人の神楽をのこ、雪の袖をかへし、白木綿花を捧げつつ、神慮をすずしめ奉る。御神託にまかせて、猶も神忠をいたさん。有難や。抑神慮をすずしむる事、和歌よりよろしきはなし。其中にも神楽を奏し乙女の袖、かへすがへすもおもてしろやな。神の岩戸の古への袖、思ひ出でられて（カケリ）シテ『和光同塵^{ワカウドウジン}は結縁^{ケツエン}の始め^{ハジメ}』八相成道^{ハチサウジヤウ}は利物^{リキョク}の終^{ハジメ}シテ『神の代七代^{シチダイ}』すなほに人あつうしてシテ『情欲^{ナガク}わかことなし』天地^{アメノチ}開けはじまりしより、舞歌の道こそ、すなほなれシテ『今貴之が言葉の末^{ノヘ}』今貴之が言葉の末の、妙なる心を感ずる故に、ヤかりに姿を見ゆるぞとて、鳥居のかさぎに立ち隠れ、あれはそれかと、見しままにてかきけすやうに失せにけ

り貴之もこれをよるこびの、名残^{ナノゴ}の神楽夜^{カミガク}は明けて旅立つ空にたちかへる旅立つ空にたちかへる。

八、注解

注解は、観世流本文については佐成氏の謡曲大観に可なり委しく書かれているが、ここには昭和宝生流を本にし、間々宝生流寛政版を引用し、それに光悦本の本文と現行観世流の本文、並びに喜多流本文を参照し、注解は、謡曲大観を基にし、中に私の所論を一部やや詳細に記すことにした。

注解中、光本とあるのは日本古典全集の光悦本、昭本は宝生流昭和版本、観本は観世流改訂本刊行会本、喜本は大正六年十一月訂正六版の喜多流謡本、寛本は宝生流寛政版本を指す。原文を示す場合は、仮字遣などすべて原文のままに記す。

○次形式は「今を始めの旅衣今を始めの旅衣日も行く末ぞ久しき」（高砂）のように七五七七四を本体とするが、「末も東の旅衣末も東の旅衣日も遙々の心かな」（隅田川）のように七五七七五のもの、「東遊びの駿河舞東遊びの駿河舞この時や始めなるらん」（羽衣）のように七五七八四、「八重の汐路の浦の波八重の汐路の浦波九重にいざや帰らん」（清経）のように七五七八四となっているものもある。蟻通では七五七五六四となっている。本文「道として」の左下にヤとあるのは、次に来る文句が七であるべきものが一字不足して六字になっていることを拍子の関係から指示しているのである。

○和歌の心を道として云々 貴之は平安朝に於ける代表的歌人で、古今集の撰者の一人であり、又その古今集の和文の序は種々の文学に引用され、特に謡曲中には屢々引かれている。（尤も蟻通では紀淑望の

漢文の序の方が使われている。句意は、和歌に専心する彼が、その心を旅の友として和歌の三神の一である玉津島明神に参詣しようというのである。貫之集では参詣を果して帰洛の途次のことになっているのを謡曲では参詣への途次のこととしている。

○住吉玉津島 伊勢負丈の和歌三神考には、住吉・玉津島・人麿と和訓葉には柿本人麿・山部赤人・衣通姫をさし、一説として住吉神社に祀られている底筒男命・中筒男命・表筒男命を挙げている。又は住吉社・天満宮・玉津島社を充てるものもある。(日本文学大辞典・大辞典等による。)住吉神社は大阪市住吉区にあり、玉津島明神は和歌山県和歌浦にあって衣通姫を祀る。

この処光本では、次第のあと、「是は紀貫之にて候我いまだ住吉玉津島にまいらす候ほとに此度おもひたち紀の路におもむき候ゆめにね」と続く。

○是は紀の貫之にて候 宝生流では詞の中の終止の「候」はソオロオと謡わずソオロの如く謡う。参らす候程のように、連体形の場合や節付のある場合の終止の候はソオロオである。尤も実際に謡う場合は、ソオロ・ソオロオ(soro・soro)でなく、ソヲロ・ソヲロヲ(soworo・soworowo)のようになる。これは「候」ばかりでなく、笑止(シヨラシ)・大雨(オヲアメ)・数行(スコヤ)・瀟湘(シヨラシヨラ)・御灯(ゴトヲ)・社頭(シヤトヲ)・申す(モヲス)・和光(ワコヲ)・なう(ノヲ)・お通り(オトヲリ)などすべて同じい。しかし、これらのヲも殊更らしくwowoというのでなく自然に発声するのである。

○道行 謡曲中の術語の一つで、ある地点までの旅行の途次の様子を

述べている。

○夢に寝て云々 夢を見ながら寝て、眼が覚めると旅をつづける。

○夜の関戸の云々 夜は旅宿に泊るのを、関所は旅人を止め調べるので、夜の関と言ひ、関所の戸を開けるのを夜の明けるにかけて言った。朝晩旅を続けながら、京の月空を、どんなにか美しかろうと思ひやるうちに、雲居の都を遠く隔って来たという意。「雲居」は京都の意と空の雲の意とを兼ねている。

○「里近ける鐘の声」の次、光本は直に「灯くらふしては数行氏かなむたの雨の足をもひかす馳ゆかすかすへきたよりもなしあら笑止や候」となっている。

○あら笑止や ああ困った。

○大雨降り オオアメ 観本タイウ 喜本は単に「雨」

○灯暗うしては云々 暗夜で灯火もなく馬も進まず困ったというのを、楚の項羽が詠んだという詩によつて書いた。

史記項羽本紀に

項王軍壁^ス下^ニ、兵少^ク食^尽タ、漢軍及^シ諸侯^ノ兵、囲^ムコト^ノ之ヲ^シ數重、夜間^ニ漢軍^ノ四面皆楚歌^ニ、項王乃大^ニ驚^テ曰^ク漢皆^ニ已^ニ得^レ楚^{タル}乎、是レ何^ゾ楚人之多^キ也ト、項王則夜起^テ飲^ム中^ニ、有^リ美人一名ハ虞、常ニ幸^セラレテ、駿馬名ハ騶、常ニ騎^レ之^ニ、於^テ是^ニ項王乃悲歌^テ慨^シ、自^ラ為^リレ詩^ヲ曰^ク力拔^キ山^ヲ兮氣蓋^フ世^ヲ、時不^レ利兮難^レ不^レ逝^ニ、難^レ不^レ逝兮可^ニ奈^ハ何^ニ、虞^ハ兮虞^ハ兮奈^レ若^シ、何[、] (漢籍国字解、史記項羽本紀第七、四二一・四二二頁による。)

ここに問題となるのは、光本に「くいかかすへき」とある文句である。観本では「虞奈何がすべき」となっているが、観世流改訂本刊行

会本の他の観世流の本には「眞意如何がすべき」としてある。寛本は光本同様、「くいいかがすへき」とあり、喜本は「眞意いかががすへき」とし、昭本も「眞意いかががすへき」にしてある。謡曲大観は本文は「眞奈何すへき」と書き、注に「くいいかが」と謡ふのは、いの意を長く延ばしたのであらう。謡曲評釈に「愚意」の字を充ててゐるのは如何かと思ふと記してある。一体謡曲の中には原拠などの文字をわざと一二字違えて用いた例は屢々見受けるので、わざと眞意としたと見られぬことは無いと言ひ得るかも知れぬが、この場合大分無理のよりに思う。やはり本来は「眞いかががすへき」とあつたのが、節付の際グイイカガと謡つたのが本文に入りこんだものかと思う。謡曲大観の説は当を得たものだが、その本文は観本に従つてゐるようで、観本では従来「眞意如何がすへき」を史記の原拠により「眞奈何すへき」とし、読仮名を「くいいかが」としたものであらう。

「巻絹」の曲中に「唯一実相」の句があるが、観世流では、唯有にユイウと振仮名をし、節付はユイウとユが延べる音になつてゐる。宝生昭本では唯にユウ、有にイウと振仮名をつけ仮名一音ずつの節をつけてある。寛本では「ゆふいふ一じつさう」と書いてある。これは明らかに唯一実相であるので昭本は漢字に改めたのである。有は旧仮名遣では漢音がイウ（発音はユウ）呉音はウで唯有は仏語でユイウと呉音で読む字である。寛本の「ゆふいふ」は節付でユウと延びたウが本文に入り「ふ」と書かれたのである。宝生流では本来ユウの延音に発音される語はすべてイウと謡う。夕暮・木綿など皆イウグレ・イウと謡うのに、巻絹の唯有がイウイウと謡わずユウイウと謡うのは節付の方で延びたのが本文に入りこんだ明らかだ証拠である。因に

「ゆふいふ」の「ふ」などは当然「う」と書くべきであるが、かような誤は光本でも寛本でも非常に多い。更に今一つ例を挙げると「景清」の曲中「さもをしや方々よ」の句がある。観世流では「さもうしや方々よ」喜本には「さもふしや方々よ」寛本には「さもおしや方々よ」とある。謡曲大観には、「さもうしやはさもしやの延言」としてあるが、筆者はこれも蟻通巻絹同様節が本文に入りこんだものと思ふのである。

○瀟湘の夜の雨云々 中国に古くから瀟湘八景と称するのがある。諸橋氏の大漢和辞典に出ているのを掲げる。「〔夢溪筆談、書画〕度支部外郎宋迪工画、尤善為三平遠山水、其得し意者、有三平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照一、謂三之八景一、好事者多伝之」（卷七、三三九頁）この瀟湘夜雨煙寺晚鐘の二句を借り、煙寺を遠寺とし、夜雨が盛んに降って遠くの寺の鐘声も聞えぬとあやなしている。

○宮寺 観・宝・喜皆ミヤテラと清んで読む。宮や寺の意。

○御灯の光 ゴトオノヒカリ。

○神さび 神々しく。

○すずしめ 神意を慰める意で、神楽をさす。

○宜禰が習はし 神職の勤め如何により盛衰する意。「きね」は光本・寛本・喜本は仮名書であるが、現行観世・宝生本には宜禰と書いてある。きねについては大言海に次の通り記している。

きね 巫覡（前条ニ挙ゲタル神楽歌ニ、神のきねトアルヲ、誤解シタル語ナリト云フ、（本居宣長）禰部ノ略転ト云フモ、イカガ、又、

祈念ノ音トモ云ヒ (倭訓栞) 彌宜ノ倒語ナリナド云フ、非ナリ
巫女。男。祝。社人。(下略)

○和光 和光同塵の略。和光同塵は老子道冲章第四「和其光同其塵」から出た語で、わが智慧の光を和げ隠して世の俗塵中に混じている意であるのを、仏菩薩が衆生済度のために、その無漏智の光を和らげ、種々の身に現じて、この世に現われることに用いられている。「和光の影」は神徳の光の意。

○無沙汰 怠けているのを言う。

○なうその火の光 光本、なふなふあの灯のひかり 観本、のうのう其火の光 寛本、なふその火の光 昭本、なうその火の光 喜本、なふなふあの火の光

なお光本この前後は、シテ詞「なふ／＼あの灯のひかりについて申へき事の候。一夜の宿を御借候へシテ」此あたりにはお宿もなし。いますこしさきへ御とをりあれ となつておるが、諸本、「一夜の宿を御借候へ」の句はない。また光本のシテ詞とあるのはワキ詞の誤である。諸本に、「一夜の宿を御借候へ」の句を省いたのは一見筋が通らぬように見えるが、ここはいかにも神の化身で、ワキの心中を読んでの答らしくてよいと思う。

○今の暗さに行く先も見えず 光本は「今の暗さに行きさきもしらす」となつてゐる。

○ここは馬上のなき所か ここは馬に乗つたままで通れぬ所か。馬上はバシヨオと読む。

○あら勿体なの 畏れ多い。光本、もつたいなの 観本は、勿体と書き、モツタイと振仮名がしてあり、喜本は勿体と書き、モツタイと振

仮名をしてゐる。宝生流もモツタイと謡う。勿体は普通には物体とも書く。

○かくぞと知つて 神域と知つていながら。光本、かくぞとして喜本かくぞとして、知つては皆促音便になつてゐるが、観本では、かくぞと知りてとなつてゐる。

○よも御命の候べきか 光本、「よも御命は候へき」とあり、観本・喜本も「よも御命は候べき」であるが、宝生流だけは、「よも御命の候べきか」と謡う。「御命」はオンニノチと謡い、観本にもオンニノチと振仮名がある。日常語でも天皇・親王などはテンノー・シンノーと言ふのであるが、謡の方はアイウエオヤユワなどの上になが来る時はナニヌネノニヤニユニヨナノと謡う。尤も宝生流ではエの上になが来る時はニエの如く謡う。例えば因縁の如きはインニエンのように謡うのである。

○御社 前記の如く、オンニヤシロと謡う。

○ともしの光の影より見れば 光本だけ「灯のかけよりよくみれば」とあり、節付を見ると、灯はヒと読んだらしい。

○宮居は蟻通の 宮居が在る蟻通と蟻に在るを掛詞にしてある。

○二柱 フタバシラ 鳥居の二本の脚。

○立つ雲すきに 脚が立っているのに雲の立つとかけてある。

○馬上に折り残す江北の柳陰 詩句の形になつてゐるが、原契はまだ分つてゐない。謡曲拾葉抄には、「此詞本文未レ考 阮瑪案府詩云駕出三北郭門二馬行不三肯馳二下レ車少鄭獨仰折三楊柳枝二矣 ○控七百首春駒のいさめる心青柳の糸もてつなく風はふくと」とある。古来柳の枝を糸に喩えた歌は随分多くある。江北の柳陰については、新撰朗

詠集に 雁 江柳影寒新雨地 贈江客 白 など見えている。漢詩にも柳絲の語を屢々使っている。次に大漢和辞典に載っている例を挙げしておく。

〔駿寶王、贈三道士李榮一詩〕 梅花如雪柳如絲、年去年來不_二自持_一。〔白居易、楊柳枝詞〕 人言柳葉似_二愁眉_一、更有_三愁腸似_二柳絲_一。

○糸もて繫ぐ駒 駒の綱を柳糸で喩えている。柳の枝で柳下に駒を繫いでおくという程の意。

○かくとも知らで 駒の駆けるのに、かようなことも知らずにとかけている。社壇のある処とも知らず馬を駆けさせるのは神の御前を畏れぬことで不覚なことであるの意。

○光本「はかなけれ」の次にシテ「いかに申へき事の候ワキ」何事にて候ぞシテ「御身はいかなる人にて渡り候ぞワキ」是は紀貫之にて候か玉津島に参り候 昭本・観本では「はかなけれ」の次はシテ「さて御身はいかなる人にてわたり候ぞワキ」これは紀の貫之にて候が、住吉玉津島に参り候 喜本は右記の中の「御身は」は「是は」となっている。

参り候の次に、宝生流では「楮は貫之にてましますか」の句があるが、他本にはこの句がない。「貫之にてましますば」は光本「貫之にて御いり候はは」とある。その次「歌を詠うで神をすずしめ御申し候へ」は、光本「歌を詠ふて神慮に手向御申し候へ」観本「歌を詠うで神慮に御手向候へ」喜本「歌をようで神をすずしめ御申し候へ」となっている。

○得たらん人 その道（和歌の道）に達した人。

○言の葉の末 歌詞。

○雨雲の云々 出典に記した貫之集の歌を少し変えておる。ありとほしともは星があるに蟻通を掛詞にしてある。こは特にアリトホシと謡う。光本も外の所は「ありとをし」と書き、この歌の文句の処は三箇所とも「ありとほし」と書いてある。「通ず」の歴史的仮名遣はトホスであるが、光本に、ありとをし・ありとほしと書きわけてあるのは謡い方をアリトホシとアリトオシと区別するためであろう。観本は三度目の処は「有り」と星とも」と書いてある。

○我等が叶はぬ 宝生流の他は、「我等が」の「が」はない。

○此和歌を 宝生流の他の光本始め他本は「和歌」とせず「うた」又は「歌」としている。

○納受 観世ではノオジュ 宝生・喜多はノオジウ。

○心に知らぬとがなれば云々 神前とは心中に知らないで、馬乗した罪だから神の御心に背かないだろうと思つて。

○万の言葉は雨雲の 歌の詞もあまたあるというのを天雲にかけてある。

○御歌や オンスタヤ 前記「御命」のところに記したと同様。

○凡歌には六義あり以下の文句は古今集の漢文の序によつて書かれて

いる。
倭歌ニ有_三六義_一 一ニ曰_レ風ト、二ニ曰_レ賦ト、三ニ曰_レ比ト、四ニ曰_レ興ト、

五ニ曰_レ雅ト、六ニ曰_レ頌ト。若_{キハ}夫ノ春鶯之轉_ニ花中_ニ、秋蟬之吟_ニ樹

上_ニ、雖_モ無_ニ曲折_一、各発_ニ三歌謡_一。物皆有_レ之、自然之理也。然_レ而神

世七代、時質人淳、情欲無_レ分、和歌未_リ作_ル。逮_ニ于素壽ノ鳥ノ尊_一

到_ニ出雲国_一、始_ニ有_ニ三十一字之詠_一、今ノ反歌之作也。其後、雖_モ二天

神之孫、海童之女^ト、莫^{カリキ}乙^ニ不^下以^テ三和歌^ヲ通^レ上^レ情者^甲。爰^ニ及^ニ二人^ノ代^ニ此風大^ニ興^リ、長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜体非^レ一^ニ、源流漸^ク繁^シ。○六義(リクギ)は漢詩の六種の体を言つたのを和歌にあてはめたのである。○六道(ロクドオ)は仏教に言う六種の境界、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上を言い、六義を六道にあてたのは謡曲作者の造意であろう。謡曲文のこの意は、歌の六義は仏道の六道に擬して定めたものである意。○光本には、「凡歌には六義あり是六道のちまたに定めをいて六の色をわかつ也」とある。

○和歌のことわざ 和歌の事・業の意。

○神代より始まり 千載集の序の冒頭に「やまとみこと歌は、ちはやぶる神代より始まりて、ならの葉の名におふ宮に広まれり」(国歌大系による)この句、拾葉抄・謡曲大観共に古今集和文の序中の、「この歌天地の開け始まりける時より出できにけり」の句を引いているが、千載集の序に心づかなかつたものと見える。

○人倫 人間界。

○中にも貫之は云々 古今集和文の序に

延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之、前の甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、万葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。(中略)貫之らがこの世におなじくうまれて、この事の時にあへるをなむよるこびぬる。(国歌大系本による。)とある。○御書所ゴシ^コドコロ宮中の書籍を保管する所。その長官を御書所預ゴシ^コドコロノアズカリという。

○よろこびを述べし 延喜の代に生れた喜びを述べたの意。よろこびを述べしに延喜の文字を隠している。

○直なる道 正しい治世。

○歌の心すなはなるは云々 心のすなおな歌には私心邪心はないの意。

○人代 神代に対し神武天皇以後の世をいう。

○風俗 習い。習わし。

○長歌短歌旋頭混本 長歌は短歌や旋頭歌よりも句数の多いものをいふ。短歌は五七五七七、旋頭歌は五七五七七のもの。普通セドウカと読むが謡では親・宝・喜皆センドオである。混本歌は四句説六句説種々あつて今日まだ定説がない。読み方は普通の辞書類にはコンボンカとしているが謡ではコンボンである。

○雑体 ザッテイ。宝生流ではザアテイのように謡う。色々の歌体の意。古今集の部分の中に「雑体」があるが、それには長歌・旋頭歌・俳諧歌を並べてある。

○源流漸く繁る云々 長歌短歌旋頭云々以下、「凡歌には六義あり」の条に記した古今集の漢文の序によって綴られている。なお古今集和文の序にも「花に鳴く鶯、水に栖む蛙の声を聞けば、生きとし生ける者、何れか歌を詠まざりける」とある。

○いづれか和歌の数ならぬ 皆和歌になるというのである。

○わが邪をなさざれば 邪心で詠むのでないから。謡曲拾葉抄に神道三百首○穴貫わか邪をなさざればなどは神の守らさるべきとある。

○かかる奇特に逢坂の かようなふしぎなことに出遭わすというのを

貫之の逢坂の歌にかけている。光本にはシテ・ワキの標記はなく地の謡になつてゐるが、この一句、観世はシテ、宝生・喜多はワキの謡になつてゐる。逢坂以下の文句は、拾遺集 秋 延喜の御時の月次の御屏風に 貫之 あふさかの関のしみづにかけ見えていまや引くらむ望月のこま とある。昔八月十五日逢坂山で諸国から献進する馬を受け取るため殿上人を使として遣わされた。望月のこまは、信濃国望月の御牧場から出した馬。歌意は、八月十五日満月の夜、望月から引いて来た馬が月影の映る逢坂の関の清水に同じく影を映しているだろうというのである。巧みに貫之の歌をもつて来て、清水に月影の見えるその月毛の駒をといひかけてある。

○越鳥南枝に巢をかけ 「越鳥」はここに限って、観・宝・喜皆エツテウと謡い、エツチョオとは謡わない。光本には「あつてう」と仮名書になつてゐる。他流のことは委しくは知らぬが、宝生流では、九州・十・立・木綿などは必ず、キウ・シウ・ジウ・リウ・イウと謡い、キユウ・シュウなどは謡わない。元來歴史的旧仮名遣では九(キウ)・州(シウ)・十(ジフ)・立(リフ)・木綿(ユフ)であるが、かような場合皆上記のように謡う。中・竜の如きは旧仮名遣チユウ・リユウであるがチウ・リウと書くことも古くから認められてゐる。鳥の仮名もテウであるから、同じわけのようであるが、他の曲などに出来る四鳥・鳥類などはシテ・オ・チ・オルイと謡い、イ列音にウのついたものとは違つていて、越鳥だけが特例である。尤も今一つエ列音にウのついたもので花筐に「縹渺悠揚」の語があるが、この「縹」に限って、宝・観・喜共にへ・ウと謡う。「渺」もベウの仮名であるが、これはヒョオと謡う。要するにエ列音にウのついたものをテ・

ウ、へ・ウと謡うのはこの二つの場合だけである。音曲玉淵集第一引く字の例の所に、蟻通の「あつて・う」、花筐の「へ・うべう」、又一流に安宅の「て・うけん」の類は引音を割りて謡ふ。これ皆誤ながら許し来る所なり。とある。

「越鳥南枝に巢をかけ」は文選卷十五古詩十九首中に見えてゐる句で、「胡馬依北風、越鳥巢南枝」(口訳漢文大成文選中四五四頁及び漢文篇八七頁による。)によつて書かれてゐる。貫之の馬が起ち上つていなないたというのに引用したので、詩句の意は胡馬はその生地の北からの風を受けて思慕していななき、越鳥はその生地の南方を思つて南枝に巢をかけるというのであるが、もとの如くに歩みゆくを強調して記されてゐる。

○「神慮の誠を仰がざるべき」のあと、諸本少しづつ異同がある。光本は、ワキ調「いかに申へき事の候。宮人にてましまさはのつとをよふて神慮をすすしめ候へ」シテ「いいて祝言を申さんと……」喜多は、わき「いかに申へき事の候。宮人にてましまさは祝を参らせられ候へして」心得申候。いで祝を申さんと……」観は、仰がざるべきのあとすぐ、ワキ調「宮人にてましまさは。祝詞を誦うで神慮をすすしめ御申候へ」承り候。いで祝詞を申さんと……」宝はワキ調「宮人にてましまさは。祝詞を誦うで神をすすしめ御申し候へ」シテ調「心得申し候いで祝詞を申さんと……」となつてゐる。

○神の白木綿かけまくも 白木綿は色の白いゆう。楮皮で作つた純白の布または紙。かけまくもは、言葉にかけて申すもの、意であるがここは神に対し、白木綿をかけるのと畏れ慎しむ意とをかけてある。白木綿の木綿もあとの木綿花の木綿も本来はユウと読むべきを観・宝共

にイウと謡う。前記参照。

○木綿花 イウバナ。木綿で作った花。木綿を細かく切った切りぬきをいう。同じ手向と言うと木綿花とをかけている。謡では「言う」と

「夕」などをどちらにもイウと謡い、掛詞に使っていることが多い。光本には、「しらゆふ」「いふはな」となっている。

○雪を散らして 木綿花を雪のように散らして。

○神司 神に仕える人。神官。親・喜はカミツカサ、宝はカミツカサ

○八乙女 宝・喜はヨオトメ、親は八少女と書きヤオトメと仮名がついている。八人の巫女。

○神楽をのこ 神楽を奏する男子。

○雪の袖をかへし 舞姿の巧妙なのをいう。雪の袖をめぐらすなどという。回雪の袖。

○白木綿花 木綿花と同じ。

○神忠 神に忠誠を致すこと。

○和歌よりもよろしきはなし 古今集漢文の序に「動ニ天地、感ニ

鬼神、化三人倫、和ニ夫婦、莫レ宜ニ於和歌」(日本古典全集本による。)

○乙女の袖かへすがへすも みこが袖をひるがえして舞うのに、再三

再四、甚だしい意をかけている。

○おもてしろやな云々 おもてしろやなは面白いことだの意。天照大神、天岩戸に隠れ、天地暗闇になった時、神々がはかつて岩戸の前で

神楽を奏せられたのを、大神覗き見られると、再び光がさして神々の

面が白く見えたと、皆あなおもしろと言ったことが古語拾遺に見え

ている。当ニ此之時、上天初テ晴テ。衆々俱ニ相見ル。面皆明白。伸テ

手ヲ歌ヒ舞ヒ。相与ニ称テ曰。阿波礼阿那於茂志呂。阿那多能志。阿那

佐夜愈。(新校群書類本から抄録。)

○和光同塵は結縁の始め云々 摩訶止観第六下に「和光同塵は結縁の

始め、八相成道は以て其終りを論じ、亦は名けて化と為す、亦名けて

応と為す」(昭和新聞大蔵経本三四頁による。)結縁は神仏と衆生

と縁を結ぶこと。○八相成道は利物の終 仏教で一切衆生に利益を与えることを利物という。釈尊の八相成道は利物の最大最終であるとの

意。八相成道について仏教大辞典から下に抄約する。仏陀が成道を中心として始より終に至る一期の相状を示したる八相成道を云ふ、成道

は八相の一なれども八相中の主眼なれば別に成道の名を掲ぐ。而も八相に就て経論の所説存没同じからず、要するに二説あり。大乘起信論

の説は一に降兜率、先に兜率天に住すること彼の天の四千歳、時機の熟するを見て白象に乗じて彼天より降下する相なり。二に入胎、白象

に乗じて摩耶夫人の右脇より入胎する相なり。三に住胎、母胎に在て

行住坐臥し一日六時諸天の為に説法する相なり。四に出胎、四月八日

藍毘尼園に於て摩耶の右脇より出生する相なり。五に出家、十九歳或

は二十五歳世の無常を觀じて王宮を出て入山学道する相なり。六に成道、六年の苦行を経て菩提樹下に成仏得道する相なり。七に転法輪、成道以後五十年間法を説て普く人天を度する相なり。八に入滅、八十歳にして娑羅雙樹の下に涅槃に入る相なり。(下略)謡曲のこの文意は、神仏が光を和げ俗界に交わり給うは衆生との結縁の始めで、仏が八相を現わして悟りを開き給うは衆生を利する最終の功德であるというのである。

○神の代七代云々 前記の古今集の序「神世七代、時質人淳、情欲無

「分」によっている。○情欲は宝観喜ともセイヨクと読む。情欲分つなしとは欲得のないのをいう。○神の代七代は天神七代ともいう。日本文学大辞典「かみよななよ」の条を抄録しておく。

「神代七代、神世七代とも書く。国常立尊以下伊弉諾尊までを偶生神は一代に数へて神代七代といふ。七代がいかなる神々から構成せられてあるかに就ては、「古事記」と「日本書記」とに於てその伝承が異なっている。即ち

(紀) 国常立 豊雲野 宇比地邇 須比智邇

角杵 活杵

意富斗能地

湊母陀琉

伊邪那岐

大斗乃弁

阿夜詞志古泥

伊邪那美

(紀) 国常立

国狭槌

豊斟淳

泥土煮

沙土煮

大戸之道

面足

伊弉諾

大古辺

惶根

伊弉冉

更にまた紀一書には、大戸之道・大古辺の偶生神が見えないで、その代りに角杵・活杵の偶生神が現れてゐる。これ等の伝承のうち、その何れが本源的であるかに就ては、未だ確説がない』云々

○天地開けはじまりしより この句の上に「かくて」を補つて解すればよい。

○貫之が言葉 詠歌をいう。

○鳥居の笠木 鳥居の頂の横木。

○あれはそれかと あれが蟻通の神かと。

○よろこびの名残の神楽云々 悦びのあまりなおも神楽を奏し、夜が

明けると旅立って帰って行った。

附 記

○甲南国文第四号 咸陽宮の文中の「花陽夫人」について、その後発見したことがある。それは「松浦宮物語」に、弁少将が遣唐副使となつて渡唐し、しやう山で華陽公主という美女から琴の秘曲を授かることが記されている。松浦宮物語は鎌倉初期には成立していたと言われる。松浦宮物語が平家物語以前の作であるなら、平家物語の作者は史記の華陽夫人と右の華陽公主などの事を取り入れて作ったのではないかと思う。

○なお同号に誤植があるので訂正し校正の疎漏をお詫びしておく。

3頁下段二行「一万八千三余里」は「一万八千三百余里」で「百」が落ちてゐる。

9頁下段柳花苑の割書の「恕字」は「怨字」の誤植。11頁六行目「写生では」は「宝生では」の誤植。